



教皇様の聲

12

248号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2000

家庭のための大聖年

〔第3回世界家族会議でのお話。各国から人々が家族と共に参加した。〕

1 皆さんをお迎えしていることは大きな喜びです。皆さんは世界の本当に様々な場所から来られました。また、世界中でラジオやテレビを通して私たちと一緒にこの家族の大聖年に参加している皆さんにもあいさつ申し上げます。（…）

私は幸運にもナザレへの巡礼を実現しました。ナザレはみことばが人となった場所です。その巡礼では皆さんのことを心に抱き、聖家族に向かって熱烈にお祈りしました。聖家族は全ての家庭にとって究極の模範です。

ナザレの家にあった霊的な雰囲気こそ、今夜もう一度ここで体験したいことです。私たちが集まっているこの大きな空間はバシリカとベルニーニの柱廊の間にあり、大きな野外の家のようなものです。私たちは本当に一つの家族「心も思いもひとつ」のものとして集まっているので（使徒言行録4・32参照）、聖家族の質素な家の優しく親密な雰囲気を感じ取り自分のものとする事ができるでしょう。そこにはマリアとヨセフが生活し、祈り、働き、イエスは「両親に仕えてお暮らしに」なり（ルカ2・51）、徐々にマリアとヨセフの平凡な生活にお入りになりました。

子供の質問は神の声がこだましたもの

2 聖家族を眺めると、キリスト者としての配偶者である皆さんは、キリストが皆さんに任された仕事について自分自身に問い掛けるようかりたてられます。キリストは皆さんに素晴らしい、そして要求の多い召し出しをお与えになったのです。

皆さんの大聖年のテーマ「子供は家庭と社会の春」は皆さんの使命について意義のある提案をします。子供たちは自分の両親を絶えず「調べる」ものではありませんか。子供はたびたび「なぜ」と尋ねるだけでなく、微笑んだり、悲しさで目をうるおして、つまり表情によっても両親を調べています。質問は、あたかも子供たちの全存在に刻みこまれているかのようであり、本当に様々な方法で表現され、子供たちの思いつきの中でも表われることがあります。子供の質問には次のようなものが考えられます。「お母さん、お父さん、私のことを愛しています

か。」「私はお母さんとお父さんにとって本当に贈物ですか。」「ありのままの私を受け入れてくれますか。」「いつも、本当に私のためになることをしようとしていますか。」

子供は、言葉よりも目でこのような質問をすることでしょう。しかしこの質問は、両親に大きな責任を課すものであり、両親に対して神の声がこだましたものと言えます。

3 子供は「春」です。この比喩は皆さんの大聖年にとってどんな意味があるのでしょうか。

この表現は私たちを人生のパノラマ、春に関わる色、光、歌に導きます。子供は本質的にまったく春の季節なのです。子供は絶えず花咲かせる希望でありまったく新しいことを始める計画、絶え間なく開かれている未来です。子供は夫婦愛の開花を示すものであり子供によって夫婦愛は見い出され強められます。子供は誕生するとき、命のメッセージをもたらしますが、そのメッセージを突き詰めて行くと、まさに命の創り主にまで立ち戻ります。子供は、特に人生の最初の段階ですべてにおいて助けを必要としますから、自然に私たちとの連帯を求めます。

子供の心を持つようイエスが弟子たちを招いたことは偶然ではありません。（マルコ10・13～16参照）皆さん、今日は子供という賜物に感謝すると同時に、神が子供たちを通してお送りになるメッセージを受けとめてください。

4 残念ながら、よく知られているように、世界中の子供たちが置かれた状況は必ずしも理想的なものではありません。多くの地域で、そして矛盾しているように聞こえますが、より豊かな国々において子供を世に送り出すという決定に、大きなためらいを感じるようになっていきます。分別は、責任ある出産に必要なものですが、度を越したものとなっています。時に、子供たちは賜物ではなく、恐れと見なされていると言えるでしょう。

また、虐待されたり搾取されている子供たちについての悲しむべき光景について何と言ったらよいでしょうか。このことについては、「子供たちへの手

紙」で注意を喚起しました。

子供には二人の親に頼る権利がある

しかし、皆さんがここに集まっているのは、皆さんが確信していることを証しするためです。その確信は神への信頼に基づいたもので、現代の傾向をくつがえすことができるものです。皆さんは「希望の祝宴」のためにここに集い、根本的なキリスト教の徳を積極的に自分のものとして「現実化」させます。

5 子供の状況は、本当に社会全体、そして家庭に直接与えられている課題です。子供を持つ皆さん、子供が両親、つまり父と母に頼ることができるということがどんなに不可欠なものか皆さん以上に理解している人はいません。（・・・）文明社会は、この本質的な真理をあいまいにし、そのあいまいさを合法的に認めることさえ要求する傾向を支持していますが、このような傾向を支持しても文明社会を進展させることはできません。

子供たちは離婚という苦しみによって非常に不利な立場に追い込まれているのではありませんか。対立する両親との間で、子供たちが自分の愛情を二つに引き裂かなければならないとは何と悲しむべきことでしょうか。両親の離婚によって引き起こされた苦しみの心理的傷跡を、いつもどんなに多くの子供たちが抱えることでしょうか。

6 多くの崩壊した家庭について、教会に求められていることは、厳しい冷静な判断を示すことではなく、神の憐れみの証言を添えて、神の言葉の光を注ぎ、多くの人間の悲劇を明確にすることです。家庭についての司牧的助言は、この精神に基づいて、離婚した信者と再婚した信者に向けられなければなりません。離婚した信者や再婚した信者は共同体から除外されません。それどころか、教会の生命を分かち合い、霊的成長の旅路を歩み始めるよう招かれているのです。霊的な成長は福音が求めていることです。教会は、離婚した信者や再婚者に真実を隠さず、その状況が、客観的、道徳的に正しくないこと、結果として秘跡が受けられないことをはっきり示します。けれども、教会は、母親としてそのような人々の近くにいることを示したいのです。キリスト者である配偶者の皆さん、このことを確認してください。婚姻の秘跡によって、なくてはならない恩恵が保証されています。両親が互いに愛することは、子供にとって食べ物と同じく必要なことです。

今日、皆さんが大聖年のあふれる恵みを神にお願いするとき、夫婦の愛情の深い一致について自身に問い掛けることが求められます。

子供のためになることはいつでも優先されるべき

7 同時に皆さんは、教える人の使命に関する重要な問い掛けを避けることはできません。皆さんは子供たちに命を与えましたが、子供の年齢に合わせて、方向づけや人生の決定において、子供たちに付き添って行くことも義務づけられます。また、子供たちの権利を尊重しなければなりません。

この時代に、子供の権利に関する認識は確かに前進しました。しかし、実際面では子供たちの権利が認められず、子供の尊厳がたびたび激しく攻撃されていることでもわかるように、苦しみの原因は残されたままとなっています。子供たちのためになることが優先されるよう注意していなければなりません。それは、子供が望まれる瞬間から始まります。道徳的に受け入れられない、人工的に妊娠を操作するという傾向は、「子供に対する権利」についてばかげた考え方をあらわにします。「子供に対する権利」は、「子供の権利」についての当然の認識、つまり、この世に生まれ、人間らしく成長するという認識に取って代えられたものです。一方、養子を受け入れることは、以上のような傾向と大いに異なり、まことに励ます価値のあることです。それは真実の愛の行為であり、両親が望むことよりも子供の利益を優先させる行為です。

8 皆さん、共に全精力を注ぎ、家庭の価値を守りましょう。そして、子供が宿った瞬間から、人間の命を尊重しましょう。これは、対話と人々との共存の基本「原理」に属するものです。私が心から願っていることは、政府や国会、国際機関、特に国連の組織が、この真理を見失わないようにということです。これらの価値を信じる善意の人々をお願いしたいことは、効果的に力を合わせて、日々の生活の中で、文化的傾向や報道機関の中で、政治的決定や国の法律の中で真理を示すということです。

9 母親である皆さん、命を守るという抑さえられない本性を深く抱いている皆さんに、心からお願いします。いつも命の源であってください。決して死の源にならないでください。

母親である皆さん、父親である皆さん、皆さんは神と協力し、命を伝えるという高貴な使命を与えられました。（「家族への手紙」8番）命を恐れなくてください。そろって家庭と命の価値を宣傳伝えてください。家庭と命を価値あるものと見なさなければ、人間にふさわしい未来はないでしょう。

この広場に皆さんが灯した光の素晴らしい光景が、光であるお方のしるしとなるまで、皆さんから離れませんかように。光であるお方は皆さんをお呼びになり、皆さんが証言した光を新しい千年期を歩む人類の道に注いでくださいます。

(2000.10.14)

高齢者、真理を知る人々

[教皇様は高齢者を迎えて、力の神話を信じる世界において、真の価値の証人となるよう呼びかけられた。]

1 「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」
(マルコ8・29) これはキリストが人々が抱く考えをお尋ねになった後、弟子たちに投げかけた質問です。このようにしてキリストは弟子との対話を深めますが、それはあたかももっと直接的で個人的な答えを要求しているかのようです。ペトロはすぐに確かな信仰を示し皆を代表して答えます。「あなたはメシアです。」(マルコ8・29)

イエスと使徒たちとの対話は、今日この広場で高齢者のための大聖年を機会に鳴り響きます。そしてこの対話によって駆り立てられ、祝っている行事の意味を深く考えさせられることとなります。大聖年はキリスト誕生二千年を記念する年ですが、全教会は特別な方法で神に捧げるものがあります。それは「とくに御子の受肉と、御子によって成就されたあがないという贈り物への、賛美と感謝の大いなる祈り」(「紀元2000年の到来」32番)です。

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」この問いは私たちに挑み続けるものですが、ここでペトロの答えを自分のものとし、キリストは肉(人)となったみことば、生命の主であると認めます。

高齢者の経験と知識が与える貴重なメッセージ

2 大聖年にローマ巡礼に来られた兄弟姉妹の皆さんを心からお迎えし、この特別な恵みの時、教会と皆さんとの一致を祝えることを喜んでいきます。

心から皆さんにあいさつ申し上げます。特にジェームズ・フランシス・スタフォード枢機卿、出席されている司教団と司祭にあいさつ申し上げます。世界中の高齢な司教と司祭に特別の思いを送ります。修道生活をする方に、社会で生きる方に、精力を傾けてそれぞれの立場にある義務を果たしてきた皆さんへも同様の思いを送ります。皆さんの愛と受けた召し出しへの奉獻と忠実さの模範に感謝しています。

この行事を見逃さないようにと、困難や苦難に直面してきた皆さんにも感謝したいと思います。それと同時に、全ての高齢者のことを思い出しています。孤独であったり病気に苦しむ人、家を離れることができない方々もおられることでしょう。しかし、そのような皆さんも霊的に結び付いて、この祝いをラジオやテレビで見守ってくださっています。不安定で特に困難な状態の皆さんに保証することは、私が祈りの中で喜んで皆さんのそばにいますこと、皆さんを思い出しているということです。

3 今日祝っている高齢者の大聖年には、現代社会

で増加する高齢者の数を考えてみても重要な意味があるといえます。大聖年を祝うというのは、まず第一に高齢者のために与えられたキリストの言葉を受け入れるということです。また同時に、高齢者が人生のこの特別な時期にもたらず経験と知恵のメッセージを大切にすることでもあります。多くの人々にとって老年期は、人生を再編成する時であり、獲得した経験と能力を最大限に利用する時期です。

高齢者への手紙の中でお話ししたことでもありますが(13番参照)、実際、老年期というのは恵みの時でさえあります。その恵みとは、キリストの救いの神秘とより深い愛で一致し、救いの計画にさらに深く参与するようという招きなのです。教会は愛と信頼をもって高齢者の皆さんを見つめ、身を捧げて人間、社会、靈魂の状況を完成させるよう励ましています。そのような状況の中でこそ、すべての人々は人生のこの重要な時期を十分に尊厳をもって生きることができるとでしょう。高齢者のためのこの大聖年の日々に、教皇庁信徒評議会は「長寿の賜物、責任と希望」というテーマの黙想を促し、高齢者の生活についての司牧的助言について考えました。この計画に深く感謝し、このシンポジウムが励みとなって人々が希望を抱き、家庭、修道院、高齢者やその世話をする人々を受け入れる施設で働く信徒が、社会や司牧者の献身を刷新するために積極的に貢献することを願っています。実際、やるべきことはたくさんあります。高齢者が必要としていることへの関心を高めること、高齢者の能力の可能性をできるかぎり発揮させること、教会生活に積極的に入り込めるよう手助けをすること、とりわけ一人の人間としての尊厳が尊重され、それが常にどこであっても重んじられることを保証することも必要です。

今日の日曜日の朗読は、神の救いの計画実現の過程を検討するよう招いていますが、これらの論点に光を与えてくれます。預言者イザヤの書から苦しみ

の救い主についての記述が読まれましたが、ここでは神に自己を完全に与える人が描かれています。「主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかつた。」(イザヤ50・5)たとえ困難で、わなに満ちていても、ヤーウエのしもべは自分に任された使命を受け入れます。神に信頼することによって、使命を果たすために必要な力と手段が与えらる。それは逆境の時でも堅く保たれます。

キリストにおいて実現する苦しみとあがないの神秘

苦しみとあがないの神秘は、ヤーウエのしもべの

姿によって示されますが、それはキリストにおいて実現しました。イエスが使徒たちに教え始めたことは、今日の福音朗読にあるように、「人の子は必ず多くの苦しみを受け」ということです。（マルコ8・31）一見人間的に考えると、この予告は簡単に受け入れられるものではないように思われます。簡単ではないということは、ペトロや他の使徒たちが即座に示した反応からもわかります。（マルコ8・32～35参照）難しくないということがあり得るでしょうか。苦しみは恐れをもたらすものなのです。けれどもキリストのあがないによる苦しみの中に、苦痛への挑戦に対する真の答えがはっきりと見い出されます。そしてその苦しみは、人間が受けるにはあまりに重いものです。キリストは確かに私たちの苦みを背負われ、痛みをお引き受けになり、十字架と復活を通して、苦難に希望と生命の新しい光を投げかけられます。

4 高齢者である兄弟姉妹の皆さん、現代の社会ではしばしば強さと力の神話が作り出されますが、皆さんの使命は、本当に重要な価値を証しすることです。それは目で見ることはできない、永遠に滅びることのないものです。なぜなら、真実の価値は、すべての人の心に刻まれ、神のみことばによって保証されているからです。

高齢者と呼ばれる皆さんは、純粋な「生命の文化」の発展のために特別な貢献ができます。皆さん、いえ私も同じように高齢者ですから私たちというべきでしょう。私たちが証ししていることは、存在の各瞬間は神の賜物であり、人生のすべての時期はすべての人が自由に使うことができる特別な宝物であるということです。

皆さんがご存じなのは、たくさんの仕事に追われることのない時間をどのように用いるかということです。また、より深い黙想や、祈りの中での神との対話が更に充実したものとなるよう励ますこともできます。

皆さんはその円熟さによって駆り立てられ、まだ経験の浅い人々に教え、人々の成長過程の奮闘を支えることができます。そして、そのような人々が未来に目を向け歩むべき道を捜すとき、時間を捧げ、手を差し伸べることもできるのです。そのようにして、皆さんは人々のために本当に貴重な仕事を成し

遂げることになります。

兄弟姉妹の皆さん、教会は心からの尊敬と信頼をもって皆さんを見守っています。教会は皆さんを必要としているのです。しかしこの社会も皆さんを必要としています。これは一ヶ月前に若い人々に告げたことですが、今日は皆さん、いや私たち高齢者に伝えていきます。教会も社会も私たちが必要としています。皆さんが自由に使える時間と才能を寛大に用いることができますように。時間や才能は人々を助け支えるために神がお与えになったものです。カテキストや典礼の指導者、キリスト者の生活を証しする人として、福音を宣べ伝えるための手助けをしてください。時間と精力を捧げて祈り、神のみことばに目を通し、そして黙想してください。

5 「わたしは行ないによって、自分の信仰を見せましょう。」（ヤコブ2・18）この言葉によって使徒ヤコブは私たちを招き、心を開き勇気をもって日々の生活の中でキリストへの信仰を表明するよう促します。特に慈善事業において、また困っている人々と結び付きを持つ時に信仰を示すことを求めています。（ヤコブ5・15～16参照）

高齢者へ日々奉仕を果たすことで積極的な信仰を証しする兄弟姉妹に対してだけでなく、能力の及ぶ限り依然として周りの人々に最前を尽くすすべての高齢者の方々についても、今日は神に感謝を示しています。

高齢者のためのこの祝いの中で、皆さんの望みは、人類の唯一の救い主キリストにおける信仰を告白し、教会への信奉を新たにすることでしょう。それは愛の旗印のもとにおかれた生活を送ることによって実現します。

今日は共に、神の御子の託身と、御子が実現なさった贖いという賜物に感謝を捧げましょう。日々の生活という巡礼を続け、人類の歴史すべて、また人生に起こる出来事の一つ一つが神のご計画の一部であるという確信を持ちましょう。キリストの復活の秘義が神のご計画をより明確にします。

信仰の巡礼者であるおとめマリア、天の母であるマリアに、人生の道を共に歩んでくださるよう、またマリアのように神のみ旨に「はい」と答えるための助けをお願いしましょう。マリアと共に永遠に心から信頼し喜んで「なれかし」を歌いながら。

(2000.917)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・火曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00

木曜日午前9：30～12：00、午後1：30～5：00となっています。



教理省宣言「主イエス」の要点

教皇庁が再び強調すること

キリストはカトリック教会を通してすべての人に完全な救いをもたらす。それゆえカトリック教会を他の諸宗教と同列に見なすことはできない。古からのこの真理は、教理省が公布した教会宣言「Dominus Iesus主イエス（仮題）」において、再び思い起こされることとなった。2000年8月6日付のこの宣言は、去る9月5日に公布され、宗教的相対主義は非カトリック者との対話に実りをもたらさないばかりか対話を土台から歪めてしまうとか力説する。以下、宣言「主イエス」の主なポイントを紹介する。

教理省がこれまでに文書で示してきたことは、諸宗教との対話を増すこと、ならびにエキュメニズムの促進に努めるということである。「公会議文書〈キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言〉では、伝統的宗教が人々に証しし捧げてきた宗教的価値に敬意を払うことで教会の肯定的で開かれた態度が示されました。『カトリック教会はこれらの諸宗教の中に見出される真実で尊いものを何も排除しない。これらの諸宗教の行動と生活様式、戒律と教義を、真摯にかつ尊敬の念をもって考察する。他宗教は、教会が保持し、示すものとは多くの点で異なっているが、すべての人を照らす真理の光を示すこともまれではない。』（「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」2）」（「主イエス」2）

宣言「主イエス」では上記の文に従って、第二バチカン公会議が再確認した教導職の主な指針を新たな形で示す。またインカルチュレーション（文化の福音化）というテーマを念頭に置きながらこう述べている。「道、真理、命である（ヨハネ14・6）イエス・キリストを間違いなく告げ知らせる教会の任務と決意は、今日においても諸宗教との対話の実践という形で果たされます。対話は、『宣教』に取って代わるものではなく、『宣教』に伴うものです。対話が目指すことは、真理への従順と自由を尊重し、理解ある態度を示すこと、相互に理解を深め、互いに豊かになることです。対話は教会の福音宣教という使命の一端を担っているのです。」（同上2）

カトリックの教義を思い起こす

宣言「主イエス」は、「確かな知識と使徒的権威によって」という言葉でヨハネ・パウロ二世に承認され、この宣言が時宜に適切であることが一層明らかになった。それは宣言の次の箇所が示している。「キリスト教の信仰と他の伝統的な宗教が対話をする場合、対話の共通基盤の理解を試みる時と同様、新たな問題が生じます。この問題に取り組むために

は、更に研究方法を見出す必要があり、深い洞察力をもって振る舞うよう示唆することも必要です。」

宣言「主イエス」は、司教、神学者、一般カトリック信者を対象としており、教会の秘義とキリストによって成し遂げられた救いという問題を体系的に扱おうとしたものではない。また自由な議論の対象となっている神学的問題について解答を試みるものでもないと教理省は明言している。宣言の目的は次のようなものである。「教会の秘義と救いの問題に対するカトリック信仰の教義を再度確認し、更に研究が進められるであろう基本的な課題を指摘すること、誤りやあいまいな考え方に反論することです。それゆえ教導職のこれまでの文書が示す教義を再び引用し、教会の信仰の遺産を補強することを目指すのです。」（同上3）

疑われている真理

周知のように、ラッツィンガー枢機卿が長官を勤める教理省は、教会が受け取った賜物、つまり大切に守るべき信仰の遺産が正しく解釈されているかどうかを見守っている。宣言「主イエス」が発行されることとなったのは、ある神学的主張が示した態度がきっかけであった。宣言の序文で次のように述べられている。「教会の絶えまない宣教活動は、今日危険にさらされています。事実上だけでなく原理的にも、宗教の多様性を認めようとする相対的な理論が起こっているからです。」その結果、「キリスト教信仰の本質を他宗教の信条と並べることで真理がうやむやにされているのです。」（同上4）例えば「キリストの啓示が絶対的で完全なものであること」「聖書が神の靈感を受けて書かれた書物であること」また、「永遠のみことばと、ナザレトのイエスは1つのペルソナであること」といった真理は時代遅れの考え方だと見なす人もいる。中でもあいまいにされているのは、宣言が強調する「キリストの救いの秘義における一性と普遍性」「教会が救いの仲介者であることについての普遍性」さらに「カトリック教会において唯一のキリストの教会が存続する」（同上4）といった根本的な啓示である。

「こういった主張の背景には、知性を妨げ、啓示された真理を受け入れようとしないうる哲学・神学の考え方や前提があります。」と宣言は述べる。そして、「神に関する真理は、歴史上のいかなる宗教によっても、包括的に完全に理解したり表わしたりすることはできない。それは、キリスト教やキリスト自身によっても実現されない。」（同上6）という考え方に注意を呼びかけている。また、真理への疑いが起こる背景として次のようなものも挙げている。「西洋の理論的思考方法と東洋の象徴的思考方法は根本

的に異なる」と主張することで真理を相対的に考える傾向、理性のみが知識の源であるとする主観主義、「他文化とキリスト教的真理には、一致点や体系的つながりがあり、互いに矛盾しない部分があるにせよ、異なった哲学的宗教的背景を持つ思想をむやみに取り入れようとする折衷主義」、また「聖書を教会の教導職と聖伝から切り離して解釈しようとする傾向」（同上4）を挙げている。

以上のような主義主張や傾向によって、「キリスト教的啓示やイエス・キリストと教会の神秘から、救いにおける普遍性と絶対的真理という特徴を失わせたり、疑いの影やあいまいさをもたらすような神学的主張」（同上4）が起こっているのである。

キリストによる啓示は決定的なもの

宣言「主イエス」（同上12）に1990年にヨハネ・パウロ二世の回勅「救い主の使命」28番が引用されていることを非常に意義深いものだと考える専門家もいる。その引用部分とは次の箇所である。「聖霊の現存と働きは単に個人に影響を与えるばかりでなく社会と歴史、民族、文化と宗教にも影響を与えます。復活したキリストはその霊の力を用いて人々の心の中ですでに働きかけておられます。また色々な習慣や文化の中に『みことばの種子』をまきキリストにおいて完全に成熟するよう準備するのも聖霊の働きです。」

もし真理が存在しないのなら確信するという行為は無意味であるとヘーゲルが述べているが、教会は宣言「主イエス」で、中心となる真理を次のように主張する。「ますます広がる相対主義的な考え方に対処するために、何にもましてキリストの啓示が完全に決定的であることを何度も主張する必要があります。」（同上5）教理省は「イエス・キリストの啓示は不完全で不十分、限界ある性質のもので、キリストの啓示は他宗教において補われるものとする説は、教会の信仰に反するものです。」（同上6）と述べている。

「それゆえ、他宗教の信仰と、対神徳である信仰の違いをしっかりと心に刻み付けておくべきです。イエス・キリストは、遠大な救済計画の単なる歯車などではなく、人類とその歴史にとって、かけがえのない普遍的で絶対的な価値を備えています。イエスは、まさにすべての人を救うために人となったみことばなのです。」（同上15）

唯一の教会

キリストの使命と意志に一致する教会という事実を抜きにして教会を考えることはできない。なぜなら、「唯一の救い主である主イエスは、ただ単に弟子たちの共同体を創設したのではなく、救いの秘義としての教会を建て」られたからである。（同上16）

初めに述べたように宣言「主イエス」はエキュメ

ニズムへの努力に大きな関心を払う。「キリストが創設した教会の一性をカトリックの信仰として固く信じなければなりません。キリストが一人であるように体も一つであり、その花嫁である教会も（一・公・使徒継承で唯一です）。（使徒信経）」（同上16）

これはカトリック以外のキリスト教徒がキリストの唯一の教会から除外されているという意味ではない。東方教会のように、使徒継承と有効な聖体祭儀を保っている教会は「真の部分教会」である。この2つの条件を揃えていないキリスト共同体は「本当の意味での教会ではありません。しかしながら、このような共同体の信者は、洗礼によってキリストと一体となった者であり、完全ではないにしろ、確かに教会との交わりの中にいます。これは、第二バチカン公会議の『エキュメニズムに関する教令』で言われていることに他なりません。」（同上17）

福音宣教の義務

宣言「主イエス」は明確な指針を示している。「もし教会を他宗教と同じレベルの一つの道だと見なすなら、カトリック信仰に反することになるでしょう。」（同上21）「教会は世界中の宗教を尊重しています。しかし同時に『〈どの宗教でもよい〉という信仰に導く宗教的相対主義の』（「救い主の使命」36）考え方を認めません。」（同上22）

「教会の外に救いなし」という有名な言葉がある一方で、キリスト者ではない人々の信仰に「みことばの種子」が見られるとも言われる。このことについて宣言は次のように強調する。「非キリスト者も恩恵を受けることができますが、教会に属し絶対的な救いの手段を持つ者と客観的に比べると、恩恵を得るのは難しいことも事実です。」「神は普遍的に救いをもたらされるという確信がありますから、主イエス・キリストへの回心と救いを告げる義務と緊急性が強まることはあっても弱まることはありません。」（同上22）

宣言「主イエス」は公布の理由を説明して締めくくる。「宣言『主イエス』は信仰の真理をいくつか再確認し明確にすることで、パウロがコリントの信徒に対して『私が第一にあなたたちに伝えたことは、私自身受けたことである』（1コリント15・3）と語った言葉に倣うことを望んでいます。誤謬も含め、問題のある提案に対しては、神学的考察によって教会の信仰を再び固め、効果的かつ適切な方法で希望の理由を説明することとなるでしょう。」（同上23）これは宣言「主イエス」が目指すことでもある。

宣言「主イエス」は教義について述べる際「信すべきである」という言葉をたびたび用い、この宣言が新しい教えではなく、各時代に通じる普遍の教導職によって伝えられてきた信仰に裏打ちされているものであることを示している。

（「アセプレンサ」2000.9.13）